

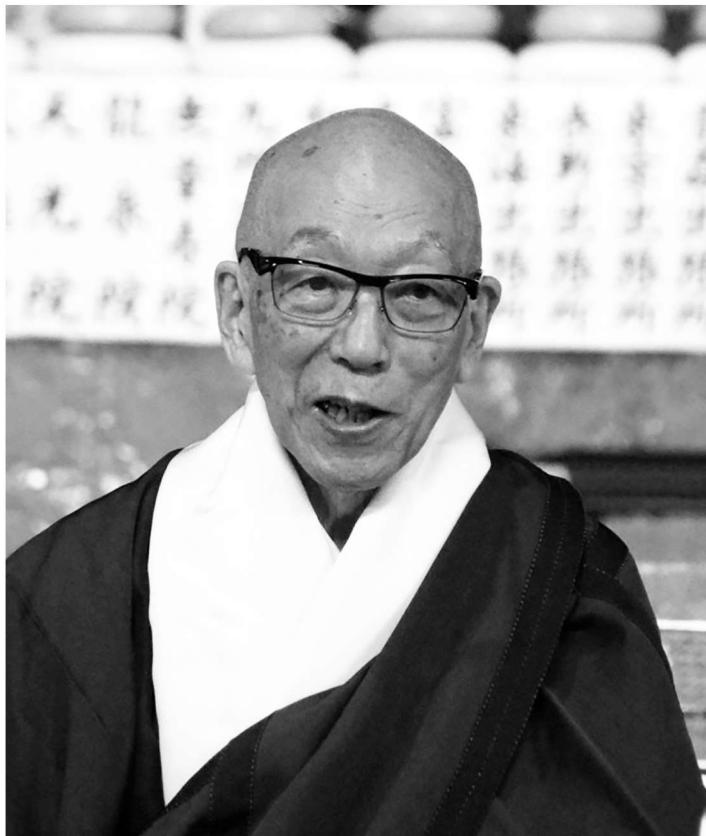
聖句
無益の句より成る一千言よりも、
間ざて安穩を得る一の益ある句を
勝れたりとする
『法句經』(荻原雲來訳)

眞生

第 77 卷 472 号

<http://canchiin.net>

平成30年7月15日
1・4・7・10月15日発行
【発行所】
真生同盟本部
〒105-0011
東京都港区芝公園
2-2-13観智院
【振替】
00160-6-80674
【電話】
03(3431)1450
【Email】
shinsei@canchiin.net
【編集兼発行人】
土屋正道
会費 年額 2,000円
一部 100円



智徳心院青蓮社紅譽上人念阿華開見佛光道大和尚 一周忌

天に仰ぎ地に臥て悦ぶ

六月二十四日（日）十五時より
観智院にて眞生同盟主幹・観智院
名誉住職・土屋光道上人の一周忌
法要、十七時よりホテルオーネックラ
東京・アスコットホールにて一周
忌追悼会が執り行われました。

一周忌法要

御導師
石田 孝信上人（青森・楽宝寺）

式衆
古田 幸隆上人（長野・法學寺）
金田 昭教上人（千葉・淨土寺）
諸澤 正俊（観智院徒弟）
酒井 正空（観智院徒弟）

式次第

『眞生礼拝儀』

- 一、念佛一会
- 二、導師式衆入堂

- 一、三札
- 二、帰命章
- 三、表白

- 一、如來光明歎德章
- 二、勸請章

- 一、光明攝取の文
- 二、念佛三昧

- 一、回向
- 二、総回向の文

- 一、同称十念
- 二、至心に発願す

- 一、導師式衆退堂

- 一、檀信徒總代挨拶
- 二、法類挨拶

- 一、武井 孝晴様
- 二、謝辞

- 一、新谷 仁海上人 (功德林寺)

- 一、土屋 正道

追悼会次第

谷口 英夫様

(観智院檀信徒總代)

(眞生同盟理事)

小林 正道上人

(法類總代・妙定院)

(眞生同盟主幹・観智院住職)

御導師
大本山増上寺八十八世法主
八木季生大僧正台下

謝辞
土屋 正道

土屋 正道



観智院本堂

光道上人一周忌追悼会謝辞

ホテルオークラ東京 六月二十四日(日)

土屋 正道(眞生同盟三代主幹)

本日、光道上人一周忌追悼会にあたり御導師をお勤め賜りました大本山増上寺法主八木季生大僧正台下、誠にありがとうございました。御法話を賜りました眞生同盟顧問石田孝信上人、御挨拶を賜りました増上寺執事長友田達祐上人、東京教区教區長高橋誠実上人。思い出を語っていただきました、宇高良哲上人、吉岡俊正先生、森島米史郎さま、谷口英夫さま暖かいお言葉をありがとうございました。その他、浄土宗内局、宗議会の方々、東京教区役職、増上寺役職、芝山内寺院の諸上人はじめ全国より大勢の方にご参列いただきました。心より感謝申し上げます。

急な遷化より一年、瞬く間に過ぎ去ったようにも感じますが、記憶に残る場面が多い一年でもあり

と思います。

本日の記念品として、風呂敷とDVD二枚組とささやかなアジサイの干菓子を用意いたしました。

DVDは祖父觀道上人の法話集『大悲に生きる』をデジタル化したものと、光道法話『光の道を伝える』として晩年のビデオ映像、

音などを収めました。ご覧をいただきたいと存じます。

風呂敷に染め抜いた光道上人の名号は、神奈川県二宮の法然寺さま門前の名号石に使われているものです。生前、中野善英上人のお言葉「トランク型の信仰と風呂敷型の信仰」の話ををしておりました。

「型に嵌めるトランク型の信仰と、スイカや一升瓶も無理なく包んでしまう風呂敷型の信仰がある。お念佛は包まれていてることも運ばれていますことも気がつかない風呂敷型の信仰だ」

ふんわり結ぶ動作や、やわらかく運ぶ動作が目に浮かびます。どうぞ普段づかいにしていただけれ

ば幸甚です。ただいまお許しを得て諏訪唐沢山阿弥陀寺の眞生頌徳碑脇に名号石建立を進めており、

唐沢山修養会最終日八月五日に除幕予定です。お近くにお寄りの際にはお参りを賜りお念佛をお称えいただければ、父がどんなにか喜ぶことかと存じます。

本年は観智院開創四百三十年、観道上人五十回忌報恩法要を務めました光道上人の卒寿を祝えな



献花



ホテルオークラ東京 アスコットホール

聞法

土屋 観道 上人(眞生同盟初代主幹)

(一)

ある日、謡の宗匠が一人の弟子をつれて散歩していたが、その時何処からとなく謡の声が聞えて来た。

その宗匠が弟子に向って云うには

「あの謡の声を止めて見ようか」

と。そして、その宗匠が謡を始めると、果たしてその声は止まつた。

又暫く散歩していると、今度は又他のところから別な謡の声が聞こえて來た。

そのとき弟子の方から宗匠に向つて、

「あの声をもう一度止めて見て下さい」

と、云うと。宗匠は微笑しながら、「此の声はどうかな」

と云つて、又謡を始めて見たが、

果してその声は止まなかつた。

十念

最後になりますが、家族、親族、法類、徒弟の皆さんのお支えはもとより、檀信徒・眞生同盟会員の皆様のご支援に厚く感謝申し上げます。本日は、まことにありがとうございました。

ある日、謡の宗匠が一人の弟子をつれて散歩していたが、その時何処からとなく謡の声が聞えて来た。

かつたことは残念ではあります、明年の觀智國師四百回忌、弁榮上人百回忌記念事業に向け念仏精進して参る所存です。今後ともご教導ご鞭撻をよろしくお願ひいたし

そこで、弟子はいぶかつて、そのわけを問うた。すると宗匠が答えた云うには
「先の人は相當に謡に心得がある。だから、自分より上手の謡を聞いて黙つたのだ。しかし後の人にはまだ習い初めであるから、他の人の謡など聞く力がない。だから止めなかつたのだ」と云つたと云うことである。
しかし、こうしたことは單に謡ばかりではないかも知れぬ。
私なども若い頃にはいつも自分の説ばかりを述べて、他人の話など聞かなかつたものである。他人の話聞くよりも自分の話を聞かせたい方がいっぱいであつた。だから、他人の話など聞く必要がなかったのである。今から思うと、それも思つて見るが、そう思うと、尚気がひけて、話をする気にもならないのである。
時には、「聞かぬ方の人にも聞く氣がないから」とも思つて見る

くと云うよりも、人から法を聞くうである。私の話など、必ずしもつまらぬとばかりも思わぬが、それでも世の人は私の話を聞いてくれる人もないと思うからである。こんなことを云うと、どうかと云つたと云うことである。
しかし、こうしたことは單に謡ばかりではないかも知れぬ。
私なども若い頃にはいつも自分の説ばかりを述べて、他人の話など聞かなかつたものである。他人の話聞くよりも自分の話を聞かせたい方がいっぱいであつた。だから、他人の話など聞く必要がなかったのである。今から思うと、尚気がひけて、話をする気にもならないのである。

(二)

ば辱かしいことばかりである。

が、そうなるとまた、そんな人にお話ししてもだめだと云う気になつて、そこにもまたお話がいやになる。之が近頃の私である。

その点になると、聞法の方では私はえ聞く氣であれば一切が説法となつてくる。よければよいで得るところがあり悪ければ悪いで、又得るところがある。そのためか、近頃の私は人に道を説くよりも、人から道を聞く方が好きになつたようである。之は私自身に自ら足らぬことの甚が多いと云うこと気づくと共に、人から道を聞くことの甚だ少いと云うことを知るようになつたからでもある。

しかし、昨日ある人の家を訪ねたところ、その人から二時間許りつづけざまにしゃべられた。一口も私には述べさせなかつた。それで先方の人は大満足であったようである。之には私も困つてしまつた。そして、まるで昔の私を見るようであるとつくづく思った。

仏教ではよく「聞法」と云うこ

とが云われてゐる。聞法とは法を聞くと云うことであるが、法を聞くと云うは如來の説法を聞くことである。その聞いた仏説を聞いた通りに伝えたと云うのが今日の一切經である。だから、お經の初めには必ず「如是我聞」とか「我聞如是」とか云つてある。かくの如く我れ聞くとか、我れかくの如く聞くと云つて、その聞いた通りを經典として伝えられたのが今日の御經である。

だから、吾々が法を説くと云うときも、吾々は如是我聞の態度で其の法を説き、又その法を聞くべきではなかろうか。それが吾々の聞法であり、説法であらねばならぬ。

近頃の人にはこうした聞法の人が甚だ少い。否、少いどころか殆ど皆無に近い。之は何としたことであろうか。

一度か二度の話を聞いて、もう判つたと云う人があつたら、それは考えものである。宗教はそんなものではない。宗教の話は何度も聞いても之でよいとそれで終るものではない。何度聞いてもあかぬ手な人のように、他人の説など聞くとする人がない。

(昭和十八年四月十日)

聞法とは仏の法を聞くことである。仏の法を聞くとは仏説を聞くことである。仏の説き給う法がそのままに吾々に聞えたのが聞法である。然るに仏の説きたまう法とは仏の悟りの心境である。仏の悟りの心境に法を聞く私が一になつたときそれが即ち私に法が聞こえたと云うものである。

聞法の私には吾々の勝手な考や話などはどうでもよい。吾々はたゞ黙々として如來の説法をすなおに聞くべきである。聞いて聞いては、お互いに止むに止まれぬ聞きぬいて、如來の説法が吾々の耳を通して、心の底に徹したとき、それが真に法を聞いたと云うものである。

近頃の人に法を聞いたと云うことは、法を説く人の心と此の間常に一体不離にして二つではない。

然るに近頃は此の法を説く人も非常に少いが、又之を聞く人も殆どない。そしてたまたま法を説く人ありとするも先きほどの謠の下手な人のように、他人の説など聞くとする人がない。

り、法に八万四千の法ありと云うが、之等のも仏説であつて、その法によつて、通う一つの心があつて、お互に止むに止まれぬ無限の妙味がその中にあるのである。

仏説がすべてこれ覚者の法とすれば之を説く人と聞く人との間にはその法によつて、通う一つの心があつて、お互に止むに止まれぬ無限の妙味がその中にあるのである。

此の「私」（『尅子論語』より）

中野 慶子(善英)上人

私が栄尊だ、私がキリストだと
思わねばいかぬ。

糀尊は百姓をせられなかつたかも
も知れん。しかし私は百姓をする
糀尊である。百姓になつてゐる糀

自動車の運転士をやつてあるイエス様であることを自ら信じます。

れた。死なれたといえば、確かに死なれたのです。しかし今「私」

れるのです。イエス様も今働きに働き、勉めに勉めていられる。尊いことです。

私が仏にナルのではないが、仏が「私」になつて活動していく下さる。だから此の「私」が尊いのです。

だから釈尊という人を他の人と
思つてはいかぬ。イエスを過去の

聽聞の態度（一）

土屋 光道 上人（眞生同盟二代主幹）

(前号より)さて、この聞法の態度ということについて、その後、蓮如上人と道元禪師のお言葉と伝えられる次のお示しに出会い、ハット教えられました、

みがかれて、いよいよ精進するなり。亦無道心の人も、一度二度こそつれなくとも、度々聞きぬれば霧露の中に行くが如く、何時濡れるとも覚えざれど

蓮如上人は
「一つのことを聞きて、いつも珍らしく始めたるようすに信の上にはあるべきなり、ただ珍らしきことを聞きたく思うなり、一つのことを幾度聴聞申すとも珍らしく始めたるようすにあるべきな
り」

も自然に衣のうるおうが如くに良き人の言葉をいくたびも聞けば、自然にはづる心も起り実の道心も起るなり。故に知たる上にも聖教をばいくたびも見るべし。師の言ばも聞たる上にも重ねて聞くべし、いよいよふかき心有るべきなり

道元禪師は、片や、師弟の関係を否定し、同行に徹する真宗、片や毫の我見をも排して、正師への絶対隨順を不可欠第一の要諦とする禪ですが、そこに全く一致した聞法の態り。この言葉一度聞たらば重ね人に近づき善縁に会うて、同じ事をいくたびも聞き見るべきなり。この言葉一度聞たらば重ね

じ事なれども聞くたびごとに、心
れ。道心一度起したる人も、同

私どもは、知的興味というか、好奇心というか、あれもこれも知

りたい。そして、それを自分の経験程度に理解して、納得し、心得たつなりになります。また、自分が意見に合致しないものは、もの知り顔に一ぱしの批評をする。そして同じ話しさは二度三度と重ねて聞かない、

「ああ、そんな話しさはもう前に聞いた、またあの話しか、そんな古い話を又か」

と、師の説教を丁度母親の小言と同じよう耳にたこ、馬耳東風と聞きながらしてしまう。しかし、師から聞かねばならぬ一大事、信仰の一番の核心は、一つこと、只一つのことを繰り返し繰り返し何度も聞くこと、そしてその度に初めて眼闊かれ、耳打たれる如き思いで何度も受けとる態度が大切だと教えていります。

私などは、あまりに近くにいて燈台もと暗く、普段聴聞に慣れ過ぎて、返つておろそかになつてしまつたのかもしれません。返つて、

はるばる遠い路をいとわずたずねて来られる方のはうが、昔、肝に銘じ魂にきぎまれて忘れ難い大切な一言をもう一度聞きたくて、本当の聴聞の態度にかなつてているのではないでしょうか。

恋いこがれて一緒になつた夫婦も、いつしか嫌怠期になり、社会の為に大いに働くこと入社したサラリーマンがいつしかその仕事の単調な繰返しにマンネリズムに陥るように、私どもの信仰もいつのまにか初心の情熱が冷めて、徽が文不知の愚鈍の身になして、「ただ一向に念仏すべし」とその選択一念の称名に帰結するとし、一文不知の愚鈍の身になして、「ただ一向に念仏すべし」とその選択本願の念仏一つを生涯かけて繰り返し繰り返し教えられました。そして、弁榮上人以来、私どももこの一言を授かって來たはず、その同じ一つの念仏に、もう一度初心に返つて耳を澄まし、自らも新しく始めたるよう不斷に称え、その本願の聖旨を尋ねねばと思います。

毎日毎日がいつも珍らしく初めたるよう新鮮で活力に充ちていける、その心こそ、この信仰を求める態度から生み出されたものでなればならぬ筈であります。

私どもは、仏とは何か、信仰との惰性に眠つたような心をさしまる前に、先ずそれを尋ね、法を聴いている己が態度それ自身を、厳しく吟味せねばなりますまい。

禪では、師の与えた一句一個の公案ただそれ一つに、全身全靈を以て対決します。

法然上人も、八万四千の法門を

おさめる一切經も、所詮『選択集』に収まり、その『選択集』はただ一念の称名に帰結するとし、一文不知の愚鈍の身になして、「ただ一向に念仏すべし」とその選択本願の念仏一つを生涯かけて繰り返し繰り返し教えられました。そして、弁榮上人以来、私どももこの一言を授かって來たはず、その同じ一つの念仏に、もう一度初心に返つて耳を澄まし、自らも新しく始めたるよう不斷に称え、その本願の聖旨を尋ねねばと思います。

六時礼讚別時念佛会参加者
(一九六六年十月)

この初心の念仏、初念の称名、念念覚醒の念仏、これが聴聞の核にあれば、自然と日々の生活の原動力となると思います。

合掌

横浜市	川崎市	板橋区	江戸川区	港
静岡市	世田谷区	所沢市	杉並区	土屋正道
市	区	市	市	長野市
市	区	市	区	古田幸隆
市	区	市	区	江戸川区
市	区	市	区	木村吉裕
市	区	市	区	杉並区
市	区	市	区	洋次郎
市	区	市	区	木村立道
市	区	市	区	服部道子
市	区	市	区	中村立道
市	区	市	区	諸澤正俊
市	区	市	区	田中道
市	区	市	区	田中典幸
市	区	市	区	天沼寛文
市	区	市	区	高崎年章
市	区	市	区	川大光誠
市	区	市	区	金子明生
市	区	市	区	酒井正空
市	区	市	区	田中章
市	区	市	区	田中幸誠
市	区	市	区	武蔵村山市



東 墙 東 墙 墙 墙 千 千 千 千 千 東 東 東 東 東 東 東 東 青 東
京 玉 京 玉 玉 玉 葵 葵 葵 葵 京 京 京 京 京 京 京 森 京

唐沢山修養会参加者

八月一日(水)～五日(日)

田 酒 諸 森 森 森 服 矢 矢 小 岩 卷 上 溝 小 局 藤 佐 野 大 石 土
中 井 澤 部 崎 崎 井 田 田 口 島 沢 藤 田 田 屋
典 正 摩 絵 恵 道 恵 美 子 弘 子 幸 空 俊 理 理 子 弘 子 幸 空 俊 理 理 子 弘 子



眞牛頌德碑と光道上人名号石



光道上人名号石除幕式を厳修

旅を愛する人は多いですが、旅が愛される所以は、非日常に自分が置くことが出来るからです。

東京 諸澤 正俊
人は多いですが、旅
以は、非日常に自分
出来るからです。

宗祖法然上人は、念佛を日常別時、臨終に分けて、特に別時念佛の重要性を説いていらっしゃい

又、日常生活の中で、工夫して
念仏を申すのではなく、念仏を申
せるよう日常生活を送れとも仰せ
です。私達凡夫にはこれが難しい
のです。

毎年八月一日から五日まで厳修される唐沢山念仏修養会は、日常生活から離れた空間の中で、念仏行に集中できる。然もそこは先達が身を削って念仏精進した場所であります。

本年は唐沢山修養会の最終日に光道上人の名号石の除幕式が行われました。

光道上人名号石除幕式

「名号石は光道上人がこの世のに存在したことを証する、単なるモニユメントではない」と感じつつ、お孫さんの森繪理さん、森摩理さんと孫弟子の正空さんと私で、綱を引かせて頂きました。

これから唐沢山に集い、念佛精進する我々に強い影響力を持つ、唐沢山全体の靈気に光道上人も加わって頂いた証であると思います。「唐沢山に登つてこい。いつでも教えるぞ」

と、除幕された名号石の前に立つと、光道上人の声が聞こえてまいります。

「死ぬまで元気、死んでも元気」

とも。

合掌 龍譽正俊

比叡山飯室谷松禪院

仲秋大念佛結集

八月二十五日(土)～二十七日(月)

参加者

東京 土屋正道



一味仏塔前

大 滋 埼 東 東 滋 大 広 三 三 三 兵
阪 賀 玉 京 京 賀 阪 島 重 重 重 重 庫
田 空 野 川 中 大 西 大 山 口 玄 洋
柳 畑 井 諸 澤 正 俊 酒 井 真 祐 秀 晃
芳 禮 子 彦 正 俊 煙 澤 真 祐 昭 俊
彦 空 德 林 院 様 (大阪) 酒 井 真 祐 晃
◆ 金百万円 ◆ 金五十万円 ◆ 金三十万円 ◆ 金二万円
鶴山瑞教様 石原義堂様 大南龍昇様 浄林寺様 (長野)
◆ 金二十万円 越智昭子様 ◆ 金一千万円 清巖寺様 (栃木) 内藤忠雄様
中川陽道様 橋本定雄様 佐野隆和様 西蓮寺様 (山口) 武井千鶴子様 松井正和様
◆ 金五万円 林サト様 三上良匡様 大谷栄様 高田幸男様 奥山清康様
新美明彦様 誓願寺様 (岡山) 糊谷みよ子様 小関恒夫様 水城実様 川副久美子様
森井明攝様 中島艇祐様 専光寺様 (富山) 長岡由枝様 ナカノユウジ様 大林寺様 (愛媛)

弁榮上人百回忌淨財報告

長尾拓應様	田代悦子様
西方寺様 (京都)	西應寺様 (大分)
石川秀治様	安宅川崇様
◆ 金四万円	極樂寺様 (広島)
◆ 金三万円	渡邊史恵様 金藏寺様 (東京)
◆ 金二万円	阿弥陀寺様 (長崎)
◆ 金一万円	龍泉寺様 (和歌山)
◆ 金五千円	山崎龍道様 小篠正樹様
◆ 金三千円	加藤裕司様 判野悦子様
◆ 金一千円	清巖寺様 (栃木) 内藤忠雄様
◆ 金五百円	得生寺様 (茨城)
◆ 金三百円	武井千鶴子様 松井正和様
◆ 金一百円	高田幸男様 奥山清康様
◆ 金五十円	糊谷みよ子様 小関恒夫様
◆ 金三十円	水城実様 川副久美子様
◆ 金二十円	森井明攝様 中島艇祐様
◆ 金十円	専光寺様 (富山) 長岡由枝様
◆ 金五円	ナカノユウジ様 大林寺様 (愛媛)

「ひかり」九月号、また「眞生」に「山崎弁榮上人讚仰会 勸募のお願い」を同封したところ、早速多くの方より、ご淨財を頂戴いたしました。心より御礼申し上げます。以下順不同ながら、「眞生」四七〇号の前報告から平成三十年九月現在までに、確認できた方のご芳名を記させて頂きます。

◆金五千円

早田ハツ様

至心に感謝申し上げます。慈業
完遂の為、何卒、ご支援よろしく
お願い致します。

山崎弁栄上人讃仰会

◆金一万五千円

兵庫 山岡和知

東京 玉蓮院・東京 寶松院

長崎 日下部匡信・静岡 片山勝彦
千葉 大信田洋子・埼玉 今井規雄

◆金一万二千円

山形 常念寺

東京 林 武則・東京 小見幸治

埼玉 戸田政江・長野 袖山栄真
川添崇祐

◆金一円

愛知 石川乗願・東京 西蓮社

東京 黒澤龍司・東京 佐藤敏郎

東京 原口弘之・佐賀 立川光俊

愛知 石川隆信・茨城 宝輪寺

東京 紫藤滋明・千葉 関野紘一

東京 滝岸寺・東京 佐藤雅彦

眞生芳志感謝

4月号で道友の皆様に会費納入
のお願いをしましたところ、多く
の方々が会費を納入して下さい
ました。至心に感謝申し上げます。

◆金三万円

東京 高寺房子・愛知 繰木正歩

新潟 長谷川善政・青森 長尾隆道

東京 稲田正新・長崎 早田明生

東京 反町キクエ・長野 古田幸隆

滋賀 吉瀬雄成・滋賀 永岡俊徳

東京 稲田正新・長崎 早田明生

静岡 長尾光雲・宮城 愚鈍院

福岡 稔貫光遠・神奈川 戸松秀明

東京 稲田正新・長崎 早田明生

東京 小野田敦子・埼玉 十連寺

滋賀 安永宏史・愛媛 中村在徹

東京 渡辺英昭・東京 加藤 瞭

青森 鷹嘴俊道

福岡 神奈川 青木章子・三重 大西弘士

東京 渡辺英昭・東京 加藤 瞭

◆金二万円

群馬 稲村博道・東京 小林正道

大分 楠久香澄・茨城 本泉寺

東京 稲田正新・長崎 早田明生

長野 高柳了志・大阪 有本亮啓

滋賀 稔貫光遠・神奈川 戸松秀明

東京 稲田正新・長崎 早田明生

新潟 柴野義郎・山口 浄泉院

福岡 塚本一紀・埼玉 蘇田三千穂

東京 遠藤幸子・東京 斎藤晃道

佐賀 藤野良海・東京 川端幹雄

東京 馬場友子

東京 生田 武・佐賀 光照寺

三重 松井正和・青森 長尾拓應

岡山 正覚寺・兵庫 三枝樹隆善

愛知 矢野司空・福岡 國武秀隆

◆金六千円

福岡 坂本一紀・埼玉 蘇田三千穂

東京 遠藤幸子・東京 斎藤晃道

◆金三千円

東京 高田幸男

東京 生田 武・佐賀 光照寺

◆金五千円

東京 佐藤利恵子・千葉 服部道子

◆金二千四百円	東京 長善寺・東京 悟東あすか
◆金二千円	東京 上田密記子・青森 花田俊岳
神奈川 石黒充郎	静岡 小沢文子・宮城 大江田博導
兵庫 木下俊昭・東京 藤澤裕子	京都 岸名優里哉・埼玉 蓮光寺
埼玉 横川 隆・秋田 加澤昌人	神奈川 林田康順・東京 植木 勉
東京 堀タイ子・東京 廣田耕子	東京 岩崎朋和・東京 並木かおり
奈良 橋詰淳子・奈良 橋詰友佳	千葉 小岩井香予子
沖縄 石黒君子・東京 佐藤冬樹	東京 石井珠子
愛知 鈴木金治・千葉 桑山智恵	東京 北野昌子・静岡 實相寺
京都 長澤博子・神奈川 武石 黙	岩手 下 弘明・神奈川 川野 誠
愛知 水谷浩志・東京 大澤稠夫	神奈川 木村る理・三重 江崎里美
茨城 鶯森了英・鹿児島 川畑憲光	三重 江崎啓子
埼玉 山口江理・千葉 磯岡哲也	(敬称略)
三重 土井唯照・東京 潮音寺	眞生同盟は、大正11年(1922年)土屋觀道上人が立ち上げた「眞生運動」に共鳴した方々が組織した「念佛ネットワーク」です。初代主幹觀道上人、二代主幹光道上人ゆかりの方々に支えられ、宗派を超えた全国のつながりは100年を迎えようとしております。
愛媛 大島浩揮・東京 荒井 寿雄	現在、機関誌『眞生』は170部、年4回発行しております。
埼玉 高桑泉・千葉 卷田和男	大正11年より連綿と発行を続けており、会費納入の有無に関わりなく有縁の方にお配りしてまいりました。昨今郵便局の第3種郵便物(1通62円)の規定が厳しくなり、送付の7割以上を有料にして、その収入を明示したものを毎年提出することが義務化されました。如来
長野 櫻井好一・神奈川 大谷隼人	を実施しております。この度は各教室のご協力のもと、皆さまに楽しんで頂ける様々なイベント、お寺の持ち味でもあります修行体験などを、盛り沢山にお届けいたしました。
北川 正明・愛媛 高橋宏文	寺の持つ文化を存続させることでご芳志をお寄せ賜った方々には、失礼と存じますがご容赦ください。
静岡 久保田修司・東京 野田弘子	※何口でもご芳志賜れば幸甚に存じます。
埼玉 伊藤ゆみ子	何卒お支えのほどよろしくお願ひ申し上げます。
神奈川 宮澤正順	合掌
東京 曾我尾好弘・東京 中島真成	さいませ。
東京 出口宣夫・千葉 久我光雲	会費 年間2000円(一口)
東京 春山啓子・滋賀 昌善寺	2年)土屋觀道上人が立ち上げた「眞生運動」に共鳴した方々が組織した「念佛ネットワーク」です。初代主幹觀道上人、二代主幹光道上人ゆかりの方々に支えられ、宗派を超えた全国のつながりは100年を迎えるとしております。

念佛道友の皆さま各位

眞生同盟会費納入のお願い

日頃、眞生同盟の活動にご理解、ご支援をいただきまことにありがとうございます。

恐れ入りますが、2018年度の眞生同盟会費を未だ納入いただいている方に再度納入のお願いをしております。郵便振替用紙を同封させていただきました。すでにご芳志をお寄せ賜った方々には、失礼と存じますがご容赦くだ

さいませ。

会費 年間2000円(一口)

の変更も視野に入れつつ対応を検討してまいります。

何卒お支えのほどよろしくお願ひ申し上げます。

観智院秋の文化祭

十一月九日(金)～十一日(日)にかけて開催する「眞生同盟本部大会」の中では、十一月十日(土)の中日に眞生会員の親睦と観智院檀信徒、各種教室の交流を目指して「秋の文化祭」を併修いたします。

普段から観智院、多聞院では、皆さまに集まつていただけるお寺を目指して、茶道教室、書道教室、お琴教室、蕎麦打ち道場、タロツト占い、落語会等々、様々な活動を実施しております。この度は各教室のご協力のもと、皆さまに楽しんで頂ける様々なイベント、お寺の持つ文化でもあります修行体験などを、盛り沢山にお届けいたしました。

詳細は次ページを御覧ください。

第56回 真生同盟本部大会

一心に 南無阿弥陀仏と いう時は 我が阿弥陀か 阿弥陀が我が 徳本上人

大悲真生阿弥陀仏が忙しいアナタのお越しをお待ちしています。如来様と一つになる実感を得るまで策励いたしましょう。今年は会員の親睦と、観智院檀信徒、各種教室の交流を目指して「秋の文化祭」を併修いたします。ぜひご参加下さい。

合掌

日 時：11月9日（金）11：00～11日（日）15：00

行 事：念佛 法話 座談（文化祭）11日 6：00 増上寺参拝 大殿大念佛

導 師：土屋正道上人

法 要：11日13：30～（御回向お申込下さい）

会 費：1日2,000円（昼食代、文化祭参加費含む）宿泊別途3,000円

（例・2泊3日12,000円、1泊2日7,000円）

懇親会：11日15：00～17：00（別途5,000円）

第1回 秋の文化祭

日 時：11月10日（土）10：00～19：00 真生同盟本部大会（11月9日～11日）併修

参加費：2,000円（昼食そば付き、17：30以降落語会鑑賞の方は1,000円）

★茶 道…………… 3階茶室 11：00～15：30
観智院にて活動中のグループによるお点前披露。また、お抹茶も頂けます。

★書 道…………… 1階茶室 11：00～15：00
観智院書道教室を主宰している経験豊富な先生の指導を受けながら筆を動かしてみましょう。その作品はこの世に1つだけのものですよ！

★書画展…………… 2階書院 終日
愛好家のみなさんのが力作がならびます。とくとご覧ください。

★そば打ち…………… 地下室 10：00～14：00
蕎麦をこよなく愛する人たちがその腕前を披露してくださります。打ったお蕎麦は昼食の際にご堪能ください。

★タロット占い…………… 3階応接室 11：00～15：00
遠い国からやってきた？ Karuna 様があなたを占ってくださいます。一度お姿を拝すれば、その魅力に引き寄せられます。勇気を出して扉を開きましょう。

★修行体験…………… 2階本堂 11：00～15：00
お坊さんの修行とはどんなことをするのか。その一端を垣間見ることができます。一見の価値あり！

★和楽器演奏…………… 2階本堂 15：30～
多聞院での練習の成果を土屋住職と共に披露していただきます。

★僧侶による演奏と踊り…………… 2階本堂 16：30～
かつてプロのミュージシャンを目指したお坊さんと踊りの名手とウワサされるお坊さんがその技を披露してくれますどんな舞台になりますか…。

★落語会…………… 2階本堂 18：00～
出演：柳家花いち・古今亭志ん松のお二人です！新進気鋭の二ツ目の高座を至近距離でご堪能ください。
いずれはこんな近くでは聞けなくなるお二人です。ネタは聞いてのお楽しみ。